

「三〇」熟語④三知

企業経営漫談士 岡野実空

「三知」は、このシリーズ初回の「三省」と同じく、『論語』由来の熟語。それは「生知」「学知」「困知」という、人のふみ行う「道」を知る三段階のこと。ここではまずその原文と本意を確認した後に、その概念を「マネジメント」に応用し、私たちが「知識」を深めるための道程を考えます。

その1: 由来と本意

『論語』季氏第十六にある、「孔子曰、生而知之者、上也。学而知之者、次也。困而学之、又其次也、困而不学、民斯為下矣」を由来とする「三知」。それは本来、生まれながらに知る者、学んで知る者、実際の困難から学ぶ者という、「道德」を知る3つの段階です。また困った経験からも学ばない「民」を下とし、いかにも儒教的な序列を示しています。

その2: 「マネジメント」への適用

さて現代を生きる私たち「民」が、その「三知」を「マネジメント」の教訓にするには、原文の「者」を「もの」(事柄)に置き換え、その段階の序列を白紙にして考え直す必要があります。

まずは「生知」。近年、遺伝学の進歩によって、さまざまな領域で「遺伝」の要素が予想以上に大きいことが明らかになっています。それは「努力」がすべてを解決するという誤った精神主義を排除する一方、家庭や教育、友人関係など、その後の環境がカバーできる余地、すなわち「学知」の範囲を明示し、そこへの私たちの注力を促しています。

さて「マネジメント」において、かねてからそれを指摘していた、泰斗ドラッカー。「マネジャーにできないなければならないことは、そのほとんどが教わらなくても学ぶことができる。しかし学ぶことができない資質、後天的に獲得することができない資質、始めから身につけていなければならない資質が、一つだけある。才能ではない。真摯さである」。

また「学知」を超えた「困知」の重要性を指摘していたのは、我が国の電力の鬼、松永安左衛門。翁の言う通り、長い浪人、闘病、投獄のすべてを体験し、克服するのはご免被るとしても、少なくとも一つくらいは体験しておかないと、実業家の端くれにも入れないという主張には、いまでも大いに納得します。それは「学知」による知識を、「見識」を超え「胆識」にまで高めるものが、自分を見つめ直す「困知」以外にないことを意味しています。

👉 「三々な経営」

1-18 「知識」の3段階

3-4 企業人の「三多」

E-29 経営人の必須体験

E-30 先達の遺訓⑩ 渋沢栄一翁

その3: 備考

今回ここでミドルの皆さんにお薦めしたいのは、日常における意識的な「困知」への取り組みです。

その手本もまたドラッカー。老いてなお泰斗が大学院で教鞭をとっていたのは、そのための第一歩。どんなに準備して講義に臨んでも、上手く説明できない、あるいは相手が理解できない部分が残る、そこから新たな課題を発見することができます。また「書く」ことも同様で、文章化する過程で、自分の理解が不十分な部分や誤解、矛盾が見つかるのは日常茶飯事。さらに相手の理解を促進するために、図表を作成する過程で、「困知」によって思わぬ気づきを得られることもしばしばです。

以上のように、「学知」による知識を広げ、深めるために、「話す」「書く」は欠かせないもの。またそれをつうじた「困知」が、さまざまな「三識」(知識、見識、胆識)をもたらすのです。

さて今回の最後は、現在の「渋沢栄一ブーム」でベストセラーになっている『論語と算盤』について。その内容は、渋沢翁自身が「学知」と「困知」によって体得したものの集大成。しかしその時代や社会背景を無視して、いまの私たちがそのまま適用しようとするのは土台無理な話です。

またそれ以前の問題として、(歴史に if はありませんが)翁が今で活躍を始めれば、たちまち「文春砲」などマスコミの餌食となり、新札として登場するどころでないことは確実ですから。

2021年6月7日 実空